

生の果物は口にしない。  
風呂に入らない。  
こうした鷗外の好みや行動は、何に由来するものなのでしょう。

明治の文豪・森鷗外は、その出発点においては、自然科学を志した医学者・森林太郎でもありました。本展では、林太郎の医学者としての足跡をたどるとともに、医学の視点から鷗外作品の再読を試みます。

森林太郎は、文久2(1862)年、代々津和野藩(現・島根県津和野町)の御典医を務めた森家の長男として生まれました。明治14(1881)年、東京大学医学部卒業後、留学への期待と家族の意に沿って陸軍に入り、明治17(1884)年からドイツで軍陣衛生学や陸軍衛生制度を学びます。帰国後は、衛生学を専門とした医事行政に関わり、明治40(1907)年には、陸軍軍医総監、陸軍省医務局長に就任、大正5(1916)年に辞任するまで務めました。

今日、林太郎の医業(衛生学)について、「脚気論争」以外あまり知られていません。しかし、現代では、“あたりまえ”の都市計画や予防医学などにおける公衆衛生の必要性を発信したのは、他でもない林太郎でした。林太郎の言葉を借りれば、「衛生学」とは、私たちが健康に暮らすための環境を整備する身近な学問です。

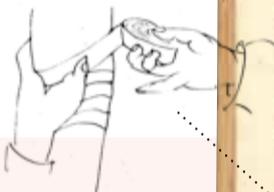
新しい医療体制の整備が急速に動き始めた時代に、林太郎が何を学び、何に取り組んだのか、また、それが現代の生活とどのように関わっているのかを、医学生時代・留学時代の自筆ノート、医学論文の自筆原稿、医学関係者との書簡などで紹介します。そして、文豪・鷗外として何を書き遺したのか、『仮面』『渋江抽斎』『伊沢蘭軒』などの作品を周辺資料とともに読み解いていきます。

林太郎の軌跡を追うことで、鷗外の意外な行動の理由、あるいは、その思想の根底にあるものが見えてくるかもしれません。

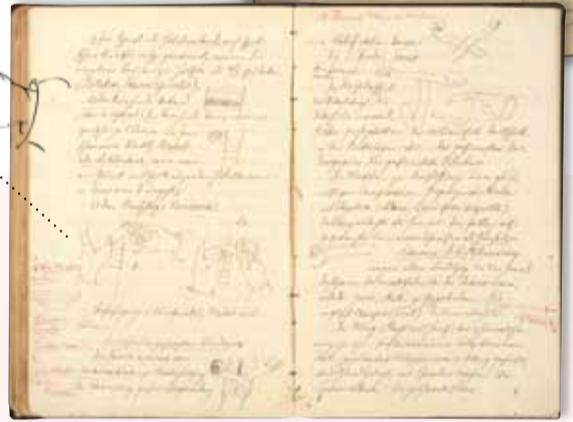
近代医学発展の地、文京区で、ドクトル・リントロウの解剖がはじまります。



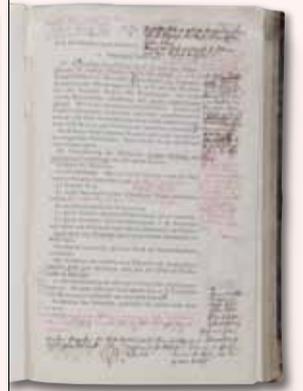
○医学生時代の受講ノート  
自筆。1冊の中にユヒツスの講義録、ヒルゲンデルフの動物学、植物学などが収録されている。



自筆の詳細な図解もみられる。



○『外科学各論』シュルツェ著  
東京大学医学部在学中に使われていた教科書。林太郎の書き入れが随所に見られる。



○石黒忠恵を迎えた医学留学生たち  
前列右から3人目:林太郎の上司・石黒忠恵(当時、陸軍省医務局次長兼内務省衛生局次長)、後列右から2人目:細菌学者の北里柴三郎、後列左端:森林太郎。[明治21年6月3日、ベルリンのフリードリッヒ街写真真館にて]



○留学時代の実験記録ノート



○恩師ベルツからの葉書  
林太郎の病氣見舞いに対する返信。ベルツは東京大学医学部で明治9年から35年まで内科教授を務めた。[明治42年10月26日付]



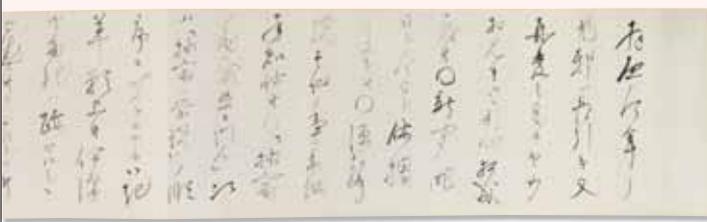
○森林太郎自筆原稿「脚気病原ノ検索」  
ドイツ留学から帰国後に、日本の脚気調査に関して意見を述べたもの。[明治21年11月12日付]



○『衛生学大意』  
女学通信会発行の「女学講義録」に分載(明治24-25年)したものをまとめたもの。一般を対象とした衛生学の啓蒙書。『陸軍衛生教程』『衛生新篇』とあわせて、林太郎の衛生学書三部作といわれる。[明治40年7月発行]

○森林太郎筆渋江保宛書簡

林太郎は大正5年1月13日から「東京日日新聞」に史伝『渋江抽斎』を連載した。執筆にあたり林太郎は、抽斎の息子・保から史料を仰いだ。この書簡は、林太郎が保に『抽斎ノ親戚並ニ門人』『抽斎ノ学説』の原稿を依頼したもの。[大正5年1月24日付]



○ロート博士から誕生日祝いにもらった酒杯  
ロートは、ザクセン軍医監・衛生学者で、ドレスデン滞在中、林太郎が特に世話になった人物。林太郎は終生この酒杯を書斎の違い棚に飾っていた。[明治19年1月]

